

モーラ構成音素とアクセント

— 広島県安芸郡熊野町方言について —

神 鳥 武 彦

Four Phonemes in Japanese Dialect and Its Accent

— On Kumano Town Dialect in Hiroshima
Prefecture as a Mōra Dialect —

Takehiko KANDORI

1. はじめに

1-1 研究の目的

日本において、古く、和歌のことを三十一文字と
いていたことは周知のことである。これは、日本語
の基本的な構造をなす単位が仮名文字に対応するもの
であるということを示している。時枝誠記 (1941年)
は、このような詩歌に現れているようなリズムに基づ
いて、日本語の音声は表出されるものであると考え、
それを「等時的に分割された拍音形式で」と指摘
した。また、服部四郎 (1949年) は、「拍」を「音韻
的音節」のことでであると定義し、これにモーラとい
う名を与えた。さらに、柴田 武 (1962年) は、モーラ
の概念に対応する音声をもっている方言と、音節の概
念に対応する音声をもっている方言とがあることを発
見し、それぞれに対して「モーラ方言」「シラビーム
方言」の名を与えた。これらの日本語の韻律について
の知見は、日本語韻律の基本的構造について有益な指
摘をしたものであった。と同時に、以上の三人が、
「拍」「モーラ」「モーラ方言」の定義をなすに当た
って、本稿で問題とする副母音の /i/ 音、長音 (以下、
/R/ で示す)、撥音 (以下、/N/ で示す)、促音 (以
下、/Q/ で示す) の4音のそれぞれとアクセントの関
係について、それぞれに述べていることは注目され
る<注1>。すなわち、それは、「拍」論を、あるいは
「モーラ」論を論証するものであったり、あるいは
「モーラ」と「シラビーム」とを峻別するためのもの
であったりするものである。このことは、これら /i/
/R/ /N/ /Q/ という4音そのものの性格の特異性を

示す点において注目される点である。

ところで、拍 (モーラ) や音節とその上に見られる
アクセントとの関係を明らかにしようとしたのが、日
下部文夫 (1964年) である。日下部は、東京方言と京
都方言とにおける単語アクセントを詳細に記述してい
る。そして、東京方言について、有意味なアクセント
核は /i/ /R/ /N/ /Q/ の位置には見られないと述べて
いる。この指摘は、ここで対象とする熊野町方言と
は類似のアクセント体系をもつものであるだけに参考
となるものである。さらに、京都方言について考察
においては、「音節」という韻律上のセグメントのほ
うが「拍」よりも有益ではないかという注目すべき論
述をもしている。

上野善道は、/i/ /R/ /N/ /Q/ という4音の性格に
ついて、次のように述べている。

モーラ音素——のばす音 (一)、はねる音 (ン)、つ
まる音 (ッ)、二重母音の副母音 (イ)——はそれ自身
では核を担えない (担えにくい) という性質がある。
そのために、モーラ単位に核を付すと、規則的なアキ
マが生ずることになる。(中略) モーラ説、音節説共
に扱おうる事実範囲は同じで、音節でなければ扱えな
い事実、少なくとも私の見る所では存在しない<注
2>。

ここで述べているように「モーラ音素」の内容が、
服部のいう、/N/ /Q/ 以外に /Vi/ /R/ を含んでいる
ことに注意しなければならない。筆者も、上野の指摘
する4音素がアクセント調査の上で特異な傾向を示す

ものであり、一方これがシラビーム方言とモーラ方言とを大別する要件をなすものであると考える。しかし、これをモーラ音素と呼ぶべきかどうか迷うところである。筆者は、これらの四つの音素は、シラビーム方言においては前接の母音と一体化して1シラブルを成すものであり、モーラ方言においてはそれ自身で1モーラを成すものであるという点から、「モーラ構成音素」と呼ぶべきではないかと考える。そして、上野は、モーラ説であろうと、シラビーム説であろうと、アクセント調査には関係がないと述べていることは注目してよからう。とはいいいながらも、上野は、モーラ音素のことから始まって、モーラ方言とシラビーム方言とについて「その韻律的単位が諸方言でどうなっているか、その調査研究を提案する」とも述べている。

さらに、上野は、1985年に科学研究費助成金による研究成果報告書を刊行している。それは『モーラ音素とアクセント核に関する調査資料集』と題するものである。この報告書で、山口県下大島郡では、モーラ音素にアクセント核が認められる語が多く認められると報告している。また、東京では、山口県の場合と同じようなアクセントで発音する人もあれば、モーラ音素の前に核を移動させて発音させている人もあるとも述べている<注3>。この中で、上野は、アクセントの立場からは、モーラ方言とシラビーム方言との違いは明確にしえないということ述べているのは注目されよう<注4>。

ところで、モーラ方言の地域内に位置する広島県安芸郡熊野町のアクセントを行ってみた。すると、同町のアクセントにおいて、アクセントの上で「揺れ」もしくは「変動」を見ることがある。すなわち、これらの事象は、/R/、/Q/、/N/、/i/の4音に見られるものである。このモーラ構成音素にアクセント上の揺れが認められるということについて、考察しようとするのが本稿の目的である<注5>。

1-2 調査地の概要

広島県安芸郡熊野町は、広島市の東南約30km、呉市の東北約20kmに位置する一町である。主たる交通路は広島市と呉市に向かっている。周囲は山であり、東西に延びる盆地である。北面の山向こうには山陽道が通っているが、この道には直接つながらないで、西の矢野町に向かう峠道を経由して、安芸郡海田町でつながる。1945年ごろまでの人口は約七千人で、主たる生業は農業と毛筆生産業であった。県営団地が1970年

代から造成されるに至って、現在で人口約二万人を超える町に変貌している。いわゆる都市近郊型の農村となっているのである。

熊野町についての実地調査は、1991年から1992年にかけて行った。被調査者は、主として1991年において65歳以上の75歳の方々である。しかし、より若い年齢層についても調査している。調査に当たっては、まず、調査語票を読んでもらう、さらに自然な対話を観察する、という二つの方法をとった。語もしくは話部の形で示しているものは、特に断らないかぎり、読んでもらった例である。なお、調査票を作るには、上野善道(1985年)を参考にした。しかし、上野の調査票に採られている語であっても、当地で用いられていない語は省いた。また、日常会話に見られる文例は、1990年9月から採録していたものである。自然会話によっても、調査票に含まれた語のすべてを調査しえた。

1-3 音声表記とアクセント表示の方法

この調査では、音声表記にカタカナを用いた。

アクセントは、次のように表示した。丸印を1モーラとして示し、その下に実際の文例を並記する(なお、1語に助詞を付けたときには、助詞を△で示した)。

○○ ○○ 「〇」○○〇〇 「〇」○○〇〇 「〇」
 〇」 ○○○○○〇 「〇」〇。
 ソー ユー 「ト」キヤー 「ワ」キヤー 「ナ
 ー」 モンデスケー 「ノ」ー。

音の上昇部を“〇”で示し、下降部を“”で示すことを原則とする。ところが、次に別の語が位置した際には、その音に上昇が認められないけれども、別の語が位置しない際には音の上昇が認められるというときには、上昇符号のみを与え、下降符号は与えない。それを、上の文例に即して示すと、次のようになる<注6>。

ソー ユ「ー → ソー ユー 「ト」キ

なお、方言表現の文例は、アクセント論的単位ごとに分かち書きする。ここでいうところのアクセント論的単位とは、文法上で、藤原與一の提唱する「話部」<注7>と一致する。それは、最も短い単位、すなわち話部で話されたときに、そのアクセントの形を明示しているからである。

2. 2モーラ語詞について

2-1 二重母音の場合

① /ai/ の認められる語

a 「〇」〇型の語

熊野町方言では、/ai/ という二重母音がそのままの形で実現されているのは、漢語であることが多い。

/ai/ をもつ2モーラの語は、次の語である。

これらのうち、漢語形名詞の語は、次の9語である。これらは、いずれも「〇」〇というアクセントをもっている。

愛, 会, 害, 才, 犀, 財, 台, 肺, 倍

なお、このうちの「台」は「ダ」ーと /R/ の形で発音されるほうが多い。本来的に和語である名詞には、次の2語がある。

貝, 鯛

文表現中において、文構造の上で動詞が形式的に名詞として転用される語（以下、これを転用名詞と呼ぶ）には、次のものがある。

逢い, 会い, 合い, 這い

これらの語は、その終止形も「ア」ウ, 「ハ」ウのようなアクセントをもっている。転用名詞の語は、動詞のアクセントと直接的に対応しているといえるようである。たとえば、

〇キノー 「アイ」ニ キタンジャ。昨日会いに来たのだ。

のようである。ところが、「ア」イー キタのように、格助詞が長音となっているときには、単語アクセントの形を保っていて、イのモーラまで高く発音されることはない。

ところで、二形態素の接合を指摘しうる語に、「差異」がある。この語は日常的に用いられている語ではないけれども、時に用いられることがあった。これを観察すると、「〇」〇のアクセントをもっていた。そして、[sa] と [i] との間には音声の下降と再上昇という事象が観察された。また、[sa] と [i] との高低の差も大きいようである。そのためか、以下に見るような「〇」〇△となった場合にも、「サ」イガとなっていて、「〇〇」△になるというような事象は生起していない。

「〇」〇の語を単語として尋ねた場合、助詞ガ, ノをつけた場合には、次のように発音される。

〇「カ」イ (貝) 〇「カ」イガ 〇「カ」イノ

ところが、方言としての自然な発話では、

〇コヨナ 「カイ」ガ アル 「デ。こんな貝があるよ。

のようである。コヨナ カイガ アルまでが1連のものとして発音されているようなものである。ところが、「こんなびっくりするような貝」という言い方をしている発話では、次のようになっている。

〇コ「ヨ」ナ 「カ」イ 「ミ」タ コトモ ナー。
こんなびっくりするような〈大きな=筆者注：この場合の意味である〉貝, 見たこともない。

コ「ヨ」ナのアクセントも「こんな風なものである」という意味を示す語である。このアクセントは、単に様態を指示するコヨナ（これは、平板型のものである）とは、異なっている。前例のような文脈においては、「貝」本来のアクセントが出現しているといっべくよからうか。それは、「貝」を強調したような言い方のものとなっている。

自然な発話の例では、

〇ヘー「デ」モ 「カイ」ノ ナカニヤー ヒラク
「ター」ンモ アル。それでも貝のなかに平らな〈形〉のものもある。

のようなものも多い。

以上、/ai/ 連母音の認められる語について、助詞の付いていない発話の例、「ガ」「ノ」助詞の付いている発話の例の、両方を見た。1モーラの助詞には、ほかに係り助詞「は」や格助詞「を」がある。当方言では、これらの1モーラ助詞の現れない表現をしていることが多い。

2モーラ以上の助詞の付いた場合には、普通には次のように発音される。

「カイ」カシ (貝しか)
「カイ」ドモ (貝など)
「カイ」サエ (貝さえ)
「カイ」ヤナンカ (貝というものなど)

しかし、「貝」が強調される場合には、「カ」イガという形になり、2モーラ以上の形をもつ助詞が強調される場合には、「カ」イカシ (貝しか)、「カ」イヤナンカ (貝など) のように、名詞のアクセント型が明示

されている。

b ○「○型の語

この型の語には、漢語名詞はなく、和語名詞としての「灰」の1語しかない。

「舞」という語は、本来「舞う」という動詞からの転成語である。これは、○「○である。「舞」は、マユー マ「ウ（舞を舞う）のように用いられる。

いわゆる転用動詞には、この他、次の2語がある。

買い、問い

以上の語を1語として発音したとき、1モーラの助詞を付けて発音したときは、それぞれ次のようなアクセントをもって実現されている。

○マ「イ ○マイ「ガ ○マイ「ノ
○カ「イ ○カイ「ガ ○カイ「ノ

当地では、いわゆる平板型のアクセントは、それを単語として発音したとき、最終のモーラが高音となる。次に、1モーラの助詞が接して1話部を成したときには、助詞が高音となる。さらに、次に一つ以上の話部が位置する場合には、次に位置する語が本来的にもっている高音部（いわゆる音韻論上の核をもつモーラ）の直前のモーラまで低くなるという規則がある。次の例は、そのことをよく示すものである。

○マイ モーチェ ヤカ「マ」シューテ コ「マッ」
タ ヨ「ノ」ー。 舞を舞ってやかましくて困ったよねえ。

なお、「を」格の接した場合には、マユーのように高音部の見られない形となる。話部の末尾が高音になるということはない。これは、次に必ず高音部を有する語が、次下に位置することを予期させる表現形式であるからであろうか。

2モーラ以上の助詞が接した場合には、次のようになる。

○マイ「カ」シ ○マイ「ド」モ
○マイ「ヤ」ナンカ（これにはマイヤ「ナン」カという形が見られることもある。マイ「ヤ」ナンカは55歳以下の若い年齢層で用いられ、マイヤ「ナン」カは、65歳以上の年齢層で聞かれることが多い。）

以上のように見ると、2モーラ以上の助詞は、「カ」シ、「ド」モ、「ヤ」ナンカ（ヤ「ナン」カ）という固有のアクセント型をもっていることがわかる。その型

の実現規則は、次のように表現できる。すなわち、これらの助詞が、有核語に接する場合には、その固有の型を実現することはない。無核語に接する場合には、助詞自らのアクセント型を実現する<注8>。

なお、形容詞「無い」の連用形は、60歳代の人々ではノ「ーの形を用いているが、60歳前半の人々から若い年齢層の人々ではナ「イの形を用いるようになっていく。ノ「ーは、後で/CVR/の語の項で取り上げることになる。

② /ui/の場合

a 「○」○型の語

漢語名詞で、/ui/をもつ語は、「髓」「類」である。しかし、これらの語は、用いられることの乏しい語である。「髓」は、「骨の髓まで」というイディオムとして用いられるのが普通である。

和語では、「杭」がある。ところが、この語は、55歳くらいから60歳位の間の人では「○」○のアクセントをもっているが、60歳代以上の年齢の人では○「○」のアクセントをもっているのが普通である。より若いほうの世代では、東京方言などの影響があつて変化したのであろうか。66歳の男性は、次のように発音していた。

○ク「ユ」ー ウッチョケー 「ヨ。 杭を打っておけよ。

和語の「ふい（大事な物事を、ちょっとしたことで失ってしまうこと）」の語は、この型のアクセントをもって発音されている。

○「フ」イニ シテ シモータ。〈つまらないことで〉失ってしまった。

「時間や距離の近いこと、または不用意にする様子」を表す、副詞の「ツ」イも、この型の語である。なお、「不意」は、当地では「に」を伴って副詞としてしか用いられない。そのため、2モーラ語とするには問題のある語である。

外来語の名詞では、「ブイ（浮標）」がある。当地は、海に面していない。しかし、生活上、この語を聞くことも多くなっている。そのためか、東京語と同じ「○」○のアクセントで用いられている語である。

b ○「○」の型の語

前項で見たように「杭」は、当地では、元来、○「○」というアクセント型をもっていたものらしい。が、55歳以下の人々は「○」○のアクセント形を用い

るようになっている。また、転成名詞の「縫い」「悔い」も、この型の語である。「食い」は、転用名詞としては「〇㇀〇」の型をとり、転成名詞としては、

〇「キョー」ワ ク「イ」ガ エー ワイ。 今日
は、〈餌〉食いがいいわい。

のように用いられている。

c 〇「〇」の型の語

「対」は、いわゆる平板型のアクセントをもっている。そのため、一語として発音した場合には、〇「〇」の型をとる。しかし、この語は一語として用いられることはなく、イデオムのように用いられるのが普通である。そのため、次のように実現される。

〇ツイニ シ「チョ」ケー。 同じようにしておけ。

このほかでは、ツイン「ナ」ル（一カップルになる）のようにも、ツイ「ジャ（同じだ）」のようにも用いている。このように見てくると、ツイ「ジャ」は3モーラ語の例といえようか。

③ /oi/ の認められる語

a 「〇㇀〇」の型の語

名詞では「鯉」が、このアクセントで発音される語である。

2つの形態素の接した「五位」では、常に「〇㇀〇」の形をとり、「〇〇㇀」の形となっていることはない。

また、動詞の命令形「来い」も1語としてはこの形で発音される。ところが、文表現中では、次のようである。

〇コッチ 「コ」イ。 こっちに来い。

〇コッチ 「コ」イ 「トー。 こっちに来いって。

このように、「〇㇀〇」の形は、はっきりとした言いおさめの場合に見られる形である。このような表現においては、単語形のアクセントが顕現しやすいものと思われる。伝聞の文末助詞（文末詞）トーは、人の発言をそのままに再現する表現をしたてるものである。そのため、上接の表現のアクセント形をそのまま実現しているともいえる。また、同時に、トーは直前の語に対して高く接することを要求する形でもあるため、「〇㇀〇」の形をとらせることになってともいえよう。やさしくいう文表現では、次のようである。

〇コッチ 「コイ」 ヤー。 こっちに来いよ。

命令形に接し、やさしく呼びかける文末助詞（文

末詞）「ヤー」の認められる文表現において、ヤーの前で、コイは「〇〇㇀」のアクセント形をもっている。

b 〇「〇㇀」の型の語

名詞では、「恋」が、この形をもつ語である。「恋」は、元来「恋う」に由来する名詞であるが、現在では動詞として用いられることはない。これは、コ「イ」のように発音される。ところが、自然な発話で、「を」格をとっている場合、

〇コ「ユ」ー シタンジャロー。 恋をしたのだろう。

のようにいわれている。この型に属する語は「恋」の1語である。

c 〇「〇」の型の語

名詞では、「甥」が、この形をもつ語である。

転成名詞、あるいは転用名詞として用いられる語には、「問い、追い、添い、沿い」がある。日常会話では、次のように用いられている。

〇コヨナ トイガ 「ア」ル。 こんな問いがある。

④ /i/ の認められる語

ここで、/i/ の構成をもつ語について述べなくてはなるまい。通常、この構成音をもつ2モーラ語は、外来語の「ビ」ー (b)、「ジ」ー (g) しかない。これらは、/VR/ と解釈されてよいものである。ところが、ここに2形態素からなる「二位」という語がある。これは、「ニ」イと発音されている。これには「五位」の場合と同様に、ニとイとの間に音声上の谷がある。それゆえ、これは /VR/ ではなく、/V'V/ と解釈されるべきものであろう。

以上、見てきたように、アクセントの揺れは、/ai/ という二重母音事態において著しい。この事象は、いわゆる /i/ 母音音声の弱音化によって生じていると考えられる。いいかえれば、/i/ 母音の弱音化とは、見方を変えれば、個々のモーラの独立性の弱まりといえなくもない。「a」i が「ai」のようなアクセント形をもっているということは、一見、/i/ 母音の弱音化ではないように見られるけれども、そうではなくて弱音化しているからこそ、/a/ 母音につられて高く発音されている形が実現しているのではないかと考えるのである。

2-2 /CVR/ の場合

a 「〇」の型の語

漢語名詞の語としては、「甲 講（真宗門徒の組織のこと）、業、塚、塔、糖、象、方、蠟、牢」がある。これらの語は、1語としては、「〇」の形をもっている。ところが、自然な会話の中では、これらの語は、次のような「〇」のアクセント型で実現されるのが普通である。

〇「ゴー」ガ タ「エン」 ヨー。 業が絶えないよ。

和語の名詞としては、「ネー」(姉)がある。これは文表現中であっても、そのままのアクセント型ももっていることが多い。

〇ワシノ 「ネー」 ジャケー 「ノ」ー。 わたしの姉だから、ねえ。

このような形は、ごく稀に用いられるものである。日常、よく用いられる語だけに、アクセントの変動が生じにくいのか。

代名詞の「ホ」ーもある。通常は、次のように発音されている。

〇「ホー」ジャ。「ホー」ジャ。 そうだ。そうだ。

これが、〇ソリヤー「ホ」ージャ。(それは、そうだ。)となると、深く考え込んだ言い方の表現となる。「黄」は、「キー」と発音される。これを〇「キー」ジャ。(黄色だ。)というときには、このキーは名詞のものである。文表現形では、アクセント高音部は、他のものと同様に /R/ のところまで伸びる。形容動詞としては、〇キー「ナ。(黄だ。)となる。

動詞の命令形のものに、「ミ」ー(見ろ)、「セ」ー(しろ)がある。単独の用法では、上記のようなアクセントをもっている。ところが、文末助詞ヤーが下接する文表現の中では、/oi/ の場合と同様に、

〇コレ 「ミー」 ヤー。 これを見ろよ。

のように発音される。

形容詞の「エ」ー(よい)、「ナ」ー(ない)も、この型の語である。これも文表現中においては、「〇」の型をとって発音されている。

〇コリヤー 「エー」 モンジャ 「ノ」ー。 これは、いい物だねえ。

〇アッチー 「ナー」ンジャケー コ「マ」ル。 あちらにないのだから、困る。

のように実現されていることが多い。さらに、準体助詞「ン」もしくは「ノン」が接した時には、次のようになる。なお、「ン」よりも「ノン」の接した表現のほうが、「もの」を強く意識させる表現となっている。そのためか、「ノン」を用いていることが多い。

〇「エー」ノンガ ホ「シー」 ヨ。 よいのが欲しいよ。

〇「エー」ンガ 「ナー」 カ「ノ」ー。 よいがないかねえ。

以上のように、/CVR/ の場合には、「〇」の型の語は、通常の表現では「〇」の型をとって発音されているものが多いといつてよい。

b 「〇」の型の語

漢語名詞としては、ボ「ー」(棒)がある。稀にしか用いられない語ではあるが、ホ「ー」(仏法の意)もある。これらの語は、平板型の語である。

感動詞の語もある。これは、1語としては、〇〇のように高音部をもたない形で発音される。これも、「〇」の型の語の一つに数えられようか。

〇ハー イカン 「ノン」カー。 へえ、行かないのか。

〇「モー」 ユーコ「ト」ー キカン「ノン」ジャケー。 もう、(私の)いうことを聞かない(忠告に従わない)のだから。

ハーやモーという語が、文表現中に用いられるときには、〇〇もしくは「〇」のアクセントの形をもって実現されていることが多い。たとい、これらの語が、「〇」のように高音部をもって発音されているとしても、それはアクセントの上で高音部を示しているとはいえない。すなわち、それは、感動の抑揚が出現しているためであるといえるであろう<注9>。

コー(「こんなに」の意)

ドー(「どのように」の意)

モー(「もっと」の意)

これらは副詞としてしか用いられないものである。1語として発音されたときにも、全くの平板な形で発音される。人によっては、コ「オ、ド「オ、モ「オのように平板型のアクセントで発音する。それは、あえて /R/ を高音にしようとするためか、前接の /o/ 音

から一度急激な下降をし、さらに上昇するというような発音となる。そのため、単独の母音のように聞こえるものになっている。

形容詞の「ない、よい」の連用形は、先に2-1-①-aの項で見たように、それぞれノ「ー、ヨ「ーといういわゆる平板型をもつ。ところが、文表現においては、次のように実現される。

○ノー 「ナ「ル。 なくなる。

平板型の名詞の場合と同様なアクセント規則が働いているわけである。

2-3 /CVN/ の場合

a 「〇「〇の型の語

この型のアクセントで実現される名詞の語には、次の語がある。

案、縁、オン(雄)、缶、癌、金、銀、剣、紺、
 棧、芯、寸、線、損、チン(犬の種類の名)、天、
 難、念、番、便、本、盆(盂蘭盆)、万、面、メ
 ン(雌)、門、紋、ヨン(四)

これらの語を1語として発音したときには「ウ「ン(運)のようになる。ところが、助詞「が」を接したときの形で、自然な言い方で発音してほしいというと、

○「ウ「ン「ガ ワ「リー。 運が悪い。

のように発音されるのが普通である。日常の会話の中でも、この形のほうが多いようである。しかし、「本当に運勢がよくない」のように、強度強調したときには、

○コトシャー 「ナン「ト 「ウ「ン「ガ ワ「リー
 「ノ「ー。 今年は、なんと運が悪いねえ。

のように、語アクセントの型を示すことがある。

2形態素のものとしては、動詞の否定形のものがある。

○「キョー「ワ 「コン「 ノン。 今日は来ないの？

この類にはデン(出ない)、ミン(見ない)がある。否定のンの後に、格助詞由来の文末助詞ノが位置するときには、上の例のようにノンとして実現される。

○イカン 「ノン「カー。 行かないのか。

以上のように、ノンは前接の語がいわゆる頭高型、

中高型というアクセント高音部がある語に接するときには低く、平板型の語に接するときには高く実現される。このようなノンのアクセント実現の規則は、それが文末助詞(文末詞)の場合に限らず、格助詞の場合にも同様である。たとえば、格助詞のものをみても、

○ソリヤー 「ミン「ノン「ガ イケン。 それは見ないのがいけない。

のようである。語末がンである名詞に格助詞ノが接する場合にも、「カン「ノン「オ(缶のを)のように発音している。なお、カン「ノン「オというような言い方をするのは、おおよそ55歳以下の人々であった。それ以上の年齢の人々は、普通ノを用いている。必ず、ノを用いるようになるのは、40歳以下の人々である。40歳から55歳の範囲の人々は、ノとノンとを混用しているといえる。

動詞の連用形を見ると、「カン「ダ(咬んだ)が認められる。これも普通には、この型で実現されているが、強調されると「カ「ン「ダとなっている。同類の語に「編む、済む、住む、飲む」がある。

b ○「〇の型の語

名詞には、「館、印、三、盆(お盆)、点、滴(“滴がよい、わるい”の言い方で用いる〈滴業からか〉)、
 椀」がある。

これらは、1語としては、○「〇の型で発音される、いわゆる平板型の語である。

動詞としては、セン(しない)がある。これは、当地ではヘンの形で用いられていることが多い。

一語として用いられている場合には、ヘ「ンというアクセント型をもっている。ところが、センテンスとしては、次の例のように用いられている。

○イ「ソ「イ「デ イ「キヤー「ヘン 「ヨー「
 ノー。 急いで行きはしないよ。
 ○セン 「ワイ「ヤー。 しないよ。

2-4 /CVQ/ の場合

当地には、1語としての/CVQ/は存しない。動詞連用形がタ(チ〈チェ〉)と接した形は、文法上の単語としては2モーラの語として、ここに取り上げられるかもしれない。けれども、それはアクセント上では、3モーラとして取り上げるべきものと考えられる。

3. 3モーラの語詞について

3-1 二重母音の認められる語

① /ai/ の認められる語

A /CaiCV/ の語

a 「〇〇〇」型の語

この型に属する語は、「合図、大豆」がある。このように、当地では、「〇〇」型のアクセントをもつ語は認められない。

動詞の連用形では、「ハ〇イタ（入った）がある。この語は、普通の対話の中では、上例のように用いられている。また、「吐いた」も、当地では「ハ〇ータとなる。「掃いた」だけは「ハ〇ータとなっている。

b 「〇〇〇」型の語

2つの形態素で構成されている「歯医者」が、この型で発音されている。

c 「〇〇〇」型の語

この型で発音される語には、「アイツ（あの奴）、会議」がある。

d 「〇〇〇」型の語

この型に属する語には、「間（3音節第2類）、会社、太鼓」がある。また、「蛙」は、当地での調査した年齢層のうち、65歳以上の人々は、カイ「ルと発音していることが多い。そのため、この項目の例となる。

動詞の連用形の語としては、ハイ「タ（履いた）がある。

B /CVCai/ の語

a 「〇〇〇」型の語

この型で発音される語には、「祝い、境」がある。たとえば、「境」はサカ「イと発音されるのが普通である。2構成要素で成っている「長居」もこの型の語である。

b 「〇〇〇」型の語

この型のアクセントで発音される語は、「二回、五回」である。これらの語は、かつては、「〇〇〇」型と発音されることはなかった。ところが、最近、中学生以下の子どもたちの間で、「〇〇〇」型で発音するようになりつつある。この変化過程に共通語アクセントの影響を指摘できるように思われる。

形容詞では、「弱い、高い、近い、長い」などの語がある。しかし、当地ではこれらの語は、ヨワーのように発音される。そのため、これらは、/CVCVR/ の項目の語のである。

c 「〇〇〇」型の語

これらの平板型の語は、1語としては、普通、「〇〇〇」型と発音されるが、丁寧に発音してもらおうと「〇〇〇」型で発音される。これに助詞の接した場合には、「〇〇〇」型と発音される。この型で発音される語には、「荷台、五台、うがい（漱い）、鹽、オカイ（お粥）、見舞い、出合い、違い、謡、二階、五階、誤解」がある。

なお、調査した老年層の人々では、「二回、五回」と「二階、五階」とは、それぞれその語アクセントで区別されている。しかし、40歳台以下の人々では、「二回、五回」も「二階、五階」と同様に、ともに平板型に変わりつつある。

② /ui/ の認められる語

この音の連続の認められる語には、一語としては /CVCui/ という音連続をもつ語しか認められない。

a 「〇〇〇」型の語

/CuiCV/ という語形には、動詞の連用形で成立している形の「ヌイダ（脱いだ）がある。これは、形態的には〇〇〇のものであって、一語としてのものではない。この類の語として「吹く」もある。これら語の場合には、/i/音が高音になっていることはない。

b 「〇〇〇」型の語

この型で発音される語には、形容詞の「暑い、熱い、低い、古い（以上の4語は、第2類の語である）、寒い、だるい」がある。

〇「キョー」ワ 「ナー」ント ア「ツ」イ 「ノ」ー。今日は、なんと暑いねえ。

このように、/i/音の前に、必ず、音の下降が観察される。

c 「〇〇〇」型の語

この型で発音される語には、名詞で、転成語の「狂い」がある。

d 「〇〇〇」型の語

この型で発音される語には、形容詞の「軽い、厚い、薄い（以上の3語は、第1類の語である）」がある。これらは、通常の平板型のように、次に高音部が位置する直前まで低音のままの形で発音される。

〇アツイ 「ホン」ガ アル。厚い本がある。

ところが、次に準体助詞の「ノ（ン）」が位置すると、次のように発音される。

○アツ「イン」ワ 「ナー」ン カ。 厚いのはないのか。

このようなアクセントの形の現れ方は、名詞の場合の平板型に、格助詞「ノ(ン)」が接した場合に見られる形とは異なっている。

動詞の連用形の語としては、フイ「タ(拭いた)」がある。

③ /oi/ の認められる語

a 「○○」型型の語

この型で実現されるものは、動詞の連用形の語である。「コイ」ダ(漕いだ)がそれである。強調でないかぎり、このアクセント形で実現される。強調法の認められる場合には、「コ」イダとなる。

b ○「○」型型の語

この型で発音される語には、名詞の「匂い」、形容詞の「黒い、白い、ツオイ(強い)、青い(第2類の語)、サトイ(聡い)、トロイ(ぼやぼやしてる人の様である)」がある。なお、動詞の連用形では、「ゴ」イタ(動いた)がある。

c ○○「○」型型の語

この型で発音される語には、名詞の「揃い、雇い、思い」がある。

d ○○「○」型型の語

この型で発音される語には、名詞の「困い」、形容詞の「重い」がある。

④ /ei/ の認められる語

これには、2形態素の複合した形であって、「○「○」型型のアクセントで発音されている「目医者」という語しか見当たらない。なお、当地では、/ei/ は、通常、/e:/ と発音されている。

3-1-①-A-aの「大豆」などに見られる/i/は、モーラとしての独立性が弱いように見られる。これに対して、3-1-B-aの「境」、bの「二回」また3-1-②-aの「脱いだ」、bの「暑い」、cの「狂い」などに見られる/i/は、その独立性が強いように見られる。

3-2 /R/ の認められる場合

A /CVRCV/ の場合

a 「○○」型型の語

この型の語は、普通、「キュー」リのように発音される。これと同じ型のアクセントで発音される名詞の語に、「箒、九箇、廊下、料理、毛布、ビール、農家、ニューボ(女房)、チョーチョ(蝶)、ジョーゴ(漏

斗)、ジュース、ダーク(大工)」がある。また、固有名詞の「京都」も同じ発音をしているものである。これらは、東京アクセントでは、「○」○○となるものである。当地で「○○」○と発音されているということは、/R/音が前接音の高さに引き寄せられたためかと考えられる。なお、「行李」は、当地では「コ」リといわれる。そのため、この語は、この項目の語とはならない。

ところで、「オー」テは「塀」の意味を、「オー」テは「王手(将棋)」の意味を表している。元来、どちらも「○○」○と発音されてよい語であるが、双方のアクセントを違えることによって同音異義語を避けているのであろうか。

動詞の連用形にも、この音素構成を指摘できるものがある。「ノー」ダ(飲んだ)、「ホー」タ(這った)、「ヨー」ダ(読んだ)、「オー」タ(会った、合った)、「ハー」タ(吐いた)、「クー」タ(食った)、「ヌー」タ(縫った)、「ヨー」タ(酔った)がそれである。これらの語も、強調法が認められる場合には、「○」○△と発音される。それは次の例のようである。

○キノー 「オー」タケー ハー 「エー」 ヨー。
昨日会ったから、もうよいよ。

b ○○「○」型型の語

この型で発音される語には、名詞の「楊枝、帽子」<注10>がある。

動詞の連用形には、ヨー「ダ(呼んだ)、トー「タ(問うた)、コー「タ(買った)、トー「ダ(飛んだ)、ユー「タ(言った)、キー「タ(聞いた)などがある。これは、当地の接続助詞チもしくはチュに接しても同じ型の発音がされる。それは、次例のようである。

○ユーチ 「ミ」ー。 言ってみよ。
○キーチュ 「キ」タ。 聞いてきた。

c ○○「○」型型の語

この型で発音される語には、名詞の「用事」がある。
B /CVCVR/ の場合

これは、第3モーラに長音の認められる語である。これには、いろいろなアクセント型で発音される語がある。

a 「○」○○型型の語

名詞には、「土曜」がある。「土用」とはアクセントによって識別されている。

この型で発音される語には、形容詞の連用形しかな

い。「暑い」は、次のように実現される。

○「ア¹ツ¹ ナッタ ノー。 暑くなったねえ。

これが、強調法で発音されている場合には、当地では、次のようになる。

○「ア¹ツ¹ ナッタ。

このように第1モーラの音が1モーラ分伸びる。すなわち、語形が変化しているのである<注11>。同種の形容詞には、「白い、長い、高い、早い、低い、古い、深い、近い、強い、弱い」がある。

b ○「¹○¹型

この型で発音される語には、名詞の「土用、手相、四十、砂糖、小僧、胡椒、五十、二等、二十」がある。これらの語は自然な対話の中では、○「○○」の形で実現しているのが普通である。

c ○「○○型

形容詞の「ア¹カー（赤い）は、この型で発音される唯一の語といえようか。

d ○「○○型

この型で発音される語には、名詞の「イチョー（銀杏）、キノー（昨日）、二重、五重、葡萄、不幸」がある。これらの語、いわゆる平板型のアクセントをもつ語である。

○ブドーガ タベ「タ¹ー。 葡萄が食べたい。

このように見てくると、単語のアクセントでは、通常、語末の1モーラが高音であるのに対して、語末に長音の認められる語形においては、音の高まりが1モーラほど前に移動しているということができよう。このような事象を見るとき、一体、語アクセントというものは何であろうかということに思いを致さざるをえない。それは、抽象的な語観念のものなのであろうか。筆者は、そうではなくて、単語を、調査票を用いて教示してもらったとき、アクセント教示者はそれ自身で文として表現しているのではないかと考えるようになった。それゆえに、あちこちの方言において、語アクセントと話部アクセントとの間に実現される型の違いが生じているのではなかろうか<注12>。

形容詞連用形のうち、ト「ユー（遠く）の型で実現されている語は、「赤い、荒い、薄い、遅い、堅い、軽い、暗い」がある。調査票による教示では、トユ「ウのように発音されている。「自然にいうとどうですか」と聞き直すと、ト「ユーが教示される。日常の

対話では、次のように実現されている。

○トユー 「ナ¹ル。 遠くなる。

さらに、これらの語が強調されると、第1モーラの音が1モーラ分伸び立て、トー「ユーのように実現される。

○トーユー 「ナ¹ル。 遠くなる。

これらの文表現を見ると、これが平板型のアクセントであることがわかる。

C 特殊な /R/ 音の認められる場合

① /e:/ の認められる語

「鰈」はカ「レ¹ーと発音される。「映画」はエー「ガである。「カレーライス」は、カレ「エである。同様に、「規定、主計」などもキテ「エ、シュケ「エとなっている。

② /i:/ の認められる語

この形の語には、形容詞のワ「リ¹ー（悪い）がある。この型の語には、「ダイー（だるい）、カイー（痒い）がある。自然な対話の中では○「○○と実現されるのが普通である。

以上のように、副母音の /i/ 音の場合よりも /R/ 音の場合のほうが、いっそう独立性が乏しいように見られる。

3-3 /N/ の認められる場合

A /CVNCV/ の場合

a 「¹○¹型

この型で発音される語には、名詞の「インキ、煉瓦、半紙、文句、天気、天下、音痴、きん歯、金庫、金魚、元気、今度、短気、本気、全部、センコ（線香）」がある。助数詞をともなった形でも、「千箇、千里、三時、三区、三位、ヨンコ（四）」がある。

b ○○「¹型

この型で発音される語には、名詞の「ホンマ（本当）、三度、アンタ（あなた）」がある。

c ○○「¹型

この型で発音される語には、名詞の「餡こ、縁起、扇子、隠居、ベント（弁当）」がある。また、動詞の連用形の「シンダ（シンジュ）（死んだ（死んで））」がある。

B /CVCVN/ の場合

a 「¹○¹型

この型で発音される語には、名詞の「二本、ニコン

(二箇)」がある。

b ○「〇」〇型の語

この型で発音される語には、名詞の「日本、絵本、値段、カバン(鞆)、時間、五寸、五人、四人、五点」がある。ところが、これらの語は、自然な会話の中では、次のように実現されることが多い。

○ホンマニ ネ「ダン」ガ 「タ」コー ナッテ
シ「モ」ーテ。 本当に値段が高くなってしまっ
て(困ってしまいますよ)。

これは、/N/音のために、アクセント核が移動しているというものであろうか。

c ○「〇〇」型の語

この、いわゆる平板型で発音される語には、名詞の「二万、うどん、碁盤」がある。助詞が接したときには、〇〇〇「△」の型となるものである。

以上のように、/N/音の独立性の乏しいことは、3-3-A-a「インキ」などの語、B-b「日本」などの語の場合にも明らかである。

3-4 /CVQCV/ の場合

当地の方言で、3モーラ語の場合、その語に/Q/音が認められるものは、/CVQCV/の形態しかない。

a 「〇〇」〇型の語

この型で発音される語には、名詞の「ミット(グローブと〜)」しかないようである。副詞には、「エツト(多量に)」がある。擬声擬態の語には「おっと、はっと、どっと」がある。

動詞の連用形には、助詞とともに「タッ」チ(〜タ)(立って(〜た))、有った、取った」がある。この型をもつ語には、それを終止形で示すと、「売る、勝つ、切る、蹴る、剃る、反る、達建つ、持つ、待つ、成る、練る、取る、降る」がある。当地の特色として、捉音が高音部として実現されることが特色である。

b 〇〇「〇」型の語

この型で発音される語には、名詞の「勝手(出入口)、トッテ(把手)、切手、ワッシ(私)」がある。「売った」のほかに、この型の語には「振る」がある。

以上のように、/Q/音は、その前接音の高さと、全く同じ高さを保っていることが注目される。そのことは、東京方言などと大きく異なるところである。それほどに、/Q/音の独立性は認められないといえようか。

3-5 /CVRN/ の場合

/CVRN/という音素の並びは、擬音の副詞の場合に見られる形である。これは、「〇〇」〇という形で実現されているのが普通である。

「キー」ン 「カー」ン 「キュー」ン

通常には、このような型のアクセントをとっていることが多いが、模写した音の形によっては、「〇」〇〇のように第一モーラに高音部の認められる場合もある。

文表現の形で認められるものには、「ナー(無い)」に助詞「ン」の接したことがある。それは、次のような型をとっている。

○ソリヤー 「ナー」ンジャ ガノー。 それはないのだがねえ。

ところが、「無い」ということを強調した表現では、次のような型が見られる。

○ソリヤー 「ナ」ーンジャ ガノー。 それはないのだがねえ。

この場合には、強調によってアクセントの実現されている型が異なるものであるといえよう。すなわち、「ナ」ーという一語の場合のアクセント型が、強調によって明示されることになっていると考えられる。以上の「ナー」ンと「ナ」ーンとを比べてみると、前者の/R/音から/N/音へと下がる音声上の落差は小さいのに、後者の/N/音から/R/音へと下がる音声上の落差は大きくかつ明確である。そのため、前者はやさしさのある日常的な表現であるのに対して、後者は「ない」ということを明示した表現となっている。このように強調法の認められる表現では、その語のアクセント型が明示されることになっている。

「ナ」ーの場合と同様なものに、「エ」ーがある。

○ソリヤー ソレデ 「エー」ン ジャ。 それはそれでよいのだ。

これが、強調法の認められる場合には、

○ソリヤー ソレデ 「エ」ーンジャ。 それはそれでよいのだ。

のような形となる。その音声上の変化も、ナーの場合と等しい。

4. 4 モーラの語詞について

以下、/i/ /R/ /N/ /Q/ の各音がその語詞の第2モーラに位置するものから、考察することにする。

4-1 連母音の認められる語詞

① /ai/ の認められる語

A /CaiCVCV/ の場合

a 「〇〇」〇〇型の語

この型をもつ語には、「挨拶（アーサツとも）、海軍、ライオン」がある。

b 〇〇「〇」〇型の語

この型をもつ語には、「貝殻、飼い主」がある。これらの語は、ある程度二つの構成要素から成っているという意識のある語である。

動詞の場合には、終止形の「買いきる」などの語がある。これらの語の活用した形のは注目される。

○ミナ カイ「キッ」テ シモータ。 皆、買いきってしまった。

○カイ「ト」ーテ ノー。 買いたくてねえ。
(カイ「ト」ーテとも発音される。)

これらを見てくると、カイキッテのように/Cai CVQ/のような構造をもつものがある。あるいは、カイ「ト」ーテ（買いたくて）とか、カ「イ」トーテ（飼いたくて）とかのような/CaiCVR/のようなものも認められる。この場合 R 音の前に下がり目のある場合と、後にある場合とがあるということは注目してよからうか。すなわち、/R/ 音アクセントが語の識別の位置にあるということを示しているからである。しかし、これらは5モーラの語詞とされるべきものであろう。

B /CVCaiCV/ の場合

a 〇〇「〇」〇型の語

この型の語には、複合語の「貰い子」がある。この語にも、/i/ 母音にアクセントの下がり目があることは注目されよう。

b 〇〇〇「〇」

この型の語には、複合語の「境目」がある。

C /CVCVCai/ の場合

〇〇「〇〇」または〇〇〇〇「〇」型の語

この型の語には、「つきあい、患い」がある。この型の語には、複合語の「患い」がある。「つきあい」も「患い」も、ともに同じアクセント型をもっている。

最終モーラに高音が位置するのは、当地方の平板型の語アクセントの一般的な実現形である。それに対して、/a/ 母音を含むモーラの前で高音となるのは /ai/ 連母音の副母音 /i/ のモーラ上の独立性の乏しさによるものと考えられる。

② /ui/ の認められる語

〇〇「〇〇」または〇〇〇〇「〇」型の語

これには、オト「ツイ（一昨日）」がある。一語で調査すると、オトツ「イとも実現されるものである。この語が、平板型の語であるためであろう。前者は /i/ 母音が副母音であること性格を、よく示しているものであり、後者は平板型のアクセントの実現形をよく示しているといえるものである。

③ /oi/ の認められる語

〇「〇」〇〇型の語

これには、「テノゴイ（手ぬぐい）」がある。

以上のように、5-1-①-A-a「海軍」の場合のように /i/ 音の独立性の弱くなっているもの、逆に B-a「貰い子」のように独立性の強いものもある。

4-2 /R/ の含まれる語

A /CVRVCVCV/ の場合

a 「〇〇」〇〇型の語

この型をもつ語には、「中学、サーカス」がある。また、「オーバー（衣）、兄弟、ユーレン（幽霊）」は、語の後半に /CVR/ /Cai/ /CVN/ をもつ語である。以上のどの語でも、強調された表現に用いられていても、そのアクセント形には変化が認められない。その意味では、/R/ 音がアクセントの下がり目を担っているといってもよい例になるかもしれない。

b 〇〇「〇」〇型の語

この型をもつ語には、「エータイ（なんということもなく、そういう傾向をもちがちである様 [副詞]）、提灯、雑布、ダーコン（ダーコとも）（大根）、コーヒー」がある。これらの語は、いずれも語の後半に /Cai/ /CVN/ /CVR/ の認められる語であり、かつその /CV/ にアクセント高音部が認められるものである。なお、コーヒーにさらに格助詞「の」の接した文表現を見ると、次のようである。

○サ「ト」ーデモ コー「ヒー」ンガ ホシー ンヨ。 砂糖といってもコーヒー（に用いる）のがほしいのよ。

このようなアクセント形を実現するのは、大根など

の場合も同様である。語末が /N/ 音に接する格助詞は、すでに見たように「ノン」となる。

○コレガ ダイ「コン」ノン カ。これが大根のか。

そして、これらの語が、格助詞「ン(ノン)」を伴った文表現において強度強調されている場合においても、○○「○○」△というアクセント形を実現している。

c ○○○「○」型の語

この型をもつ語には、「大風、十月」がある。

B /CVCVRCV/ の場合

a ○「○○」○型の語

この型をもつ語には、「素人、玄人」がある。通常の文表現においては、○「○○」○のアクセントで発音されているが、強調された場合には、次の対話例のように、○「○」○○の形をもって実現されている。

↓ A ○ア「ノ」ヒター シ「ロー」トジャロー
オモウ デ。

あの人は素人だろうと思うよ。

↑ B ○「ナ」ニガ 「キョー」カラ シ「ロ」ート
トン ナッタ ンヨー。

なにが、今日から(格好だけの)素人になったのよ。

この対話は、Aさんは平静に発言しているのに対して、Bさんは「素人」ということにこだわっている発言をしているものである。

動詞連用形の語には、ナ「ロー」タ(習った)、ク「ダー」タ(砕いた)がある。自然な対話中ではなく、これらを、調査票を読んでもらうという調査法では、○「○」○○の型で実現されるのが普通である。

b ○○○「○」型の語

動詞連用形のナロー「ダ(並んだ)、ウトー「チェ(歌って)、ツロー「チェ(連れだって)<注13>」などがある。これは、○○○「△」のように示すべきものであろうか。

C /CVCVCVR/

a ○「○」○○型の語

この型をもつ語には、「月曜」がある。

b ○○「○」○型の語

この型をもつ語には、「八十」がある。

4-3 /N/ 音の含まれる語

A /CVNCVCV/ の場合

a 「○○」○○型の語

この型をもつ語には、「天国、缶きり、三角、三匹」がある。ところが、語末の /CV/ の代わりに /N/ 音の認められる語もある。「運賃、三番、何年、百年、千年」がそれである。また、/R/ 音の認められる語もある。「県庁」がそれである。

b ○○「○」○型の語

この型をもつ語には、「どんぐり、銀紙」がある。語末に /ai/ の認められる語には、「心配、三回、三階」がある。このうち、「三回、三階」は、45歳以下の人々において○○「○○」といういわゆる平板型になりつつある。

その他、「センサー(先生)」もこの型の語である。これも語末に /R/ 音というモーラ構成音素をもって語である。小学生などでは○○「○○」という型を用いるようになってきている。

c ○○「○○」型の語

通常の会話において、この型をもつ語としては、/CVNCVN/ の語音構造をもつものばかりが見られる。「何遍、三人」がそれである。二人の対話を見ると、アクセントの変化している様子がよくわかる。

↓ A ○キ「ノ」カラ ナン「ベン」モ キタン
「デ。

↑ B ○ナン「ベ」ンモ カ。

Aさんが自分が何度も訪ねてきたことを述べると、Bさんは「何度も」と改めて、強度強調した言い方で応答している。そのナンベンのアクセントが、それぞれに異なっていることは注目されてよからう。強調法と普通の発話との間に差が認められるわけである。

d ○○○「○」型の語

この型をもつ語には、「考え」がある。

e ○○「○○」型の語

名詞として、この型をもつ語にも、/CVNCVN/ の語音構造をもつものしか見られない。「因縁、三千」がそれである。

B /CVCVNCV/ の場合

a ○「○○」○型の語

この型をもつ語には、「記念日」がある。「記念」と「日」とがの複合を指摘しやすい語であることが注目される。

動詞連用形の語としては、エ「ラン」ダ(選んだ)

がある。これも、調査票による調査では、エ「ラ」ンダと実現されることが多い。同類の語には、「恨む、頼む、悩む、憎む、僻む」がある。

b ○○○「○型」の語

この型の語には、動詞連用形の語しかない。そのため、これは、○○○「△」のように示すべきものであろうか。

動詞連用形では、アスン「ダ（遊んだ）」がある。同種の語には、「浮かぶ、沈む、進む、運ぶ」がある。なお、当地では、「並ぶ」は、この型のナロー「ダ」の形で実現されている。

4-4 /Q/ の認められる語

A /CVQCVCV/ の場合

a 「○○」○○型の語

これには、「イッコン（一個）」がある。この語では、コンの部分も/N/の認められる語として、注目しなければならぬものである。

b ○○「○」○型の語

この型の語には、「一回、一階」がある。これもカイの部分か/ai/連母音をもっている語である。45歳以下の人々では、これが平板型の○○「○○」の型となっている。しかし、平板型の語であるにもかかわらず、これらの語は、○○○「○」の型をとっていることはない。それは、この語形の前半に/CVQ/というモーラ構成音素が存するためであろうか。

c ○○○「○」型の語

この型の語には、「訴え」がある。

d ○○「○○」型の語

この型の語には、「八集、八週、八州」などの語がある。これが○○「○○」という形で実現されていることはない、下がり目が/R/音の次に認められることは、注目されよう。

B /CVCVCVCV/ の場合

これには、動詞連用形しか認められない。そのため、最終モーラは△で示した。

a ○「○○」○型の語

ア「マ」ッ「タ（余った）」が、この型で実現されている語である。同種の語には「祈る、移る、思う、詰まる、縛る、帰る、曇る、作る、光る、濁る、巡る」がある。

b ○○○「○」型の語

アガッ「タ（上がった）」が、この型で実現されている語である。同種の語には「当たる、送る、飾る、変

わる、削る、探る、握る、譲る」がある。

以上のように、4モーラ語になると、それぞれのアクセント型に所属する語は、一定の語群になっているという傾向が見られるようになる。それに伴って、/i/ /R/ /N/ 音のアクセントは、アクセント型ごとに決まっていると思えるようになる。

5. おわりに

以上、モーラ構成音素の認められる語のアクセントについて、熊野町方言を対象として考察してみた。しかし、ここでは、2モーラ語から4モーラ語までしか考察していない。それでも、幾つかのことがわかった。これをまとめてみると、次のようにならうかと考える。

① 二重母音 /ai/ の認められる語の場合には、/a/ の音の高さに応じて低く発音されたり、逆に高く発音されたりする。なかでも、自然会話においては、/a/ が高く発音されている語類の場合、/i/ も高くなりがちであった。しかし、モーラ数が多くなると、この傾向に反するものも見られることになる。

② /R/、/N/ 音の認められる語の場合には、/ai/ の場合以上に、/R/ 音はその前接音の高さと同じ高さをとる傾向が強かった。そのため、単語として発音するときには、その語のアクセントの下がり目が明示されていたものが、自然会話の中では、それが/R/、/N/ 音のところまで移動しているという事象が多く認められた。

③ /Q/ 音の認められる語では、/Q/ 音は前接音の高さと全く同じであった。これは、/Q/ 音の独立性のなさを示しているものと考えられる。

④ モーラ構成音素の位置によって、ある一つのアクセント型が見られなかったり、見られたりする傾向があった。

これらの諸点を考え合わせてみると、モーラ構成音素とアクセントとの関係は、次のようにいうことができるのではなからうか。

⑦ /ai/ に存する /i/ 音は、弱母音といわれても、なお、独立した単音という性格をもっている。それ故に、/i/ 音の位置でアクセントの浮動が見られる。

⑧ /R/ 音、/N/ 音も、独立性の弱いものである。そのため、/Q/ 音ほどではないにしても、前接音のアクセントの高さに支配されがちである。

⑨ /Q/ 音は、実質的な音声としても単音という形をもっていないものである。そのため、前接音のアクセントの高さに支配されている。

このようなモーラ構成音素は、果たしてモーラとしての等時的な拍音の形式のものであろうか。もし等時的ということがいえるのであれば、モーラとモーラの間には拍を区分する壁のようなものと、仮説的に考えてもよからう。ところが、この壁が壊れかかっているのが、当熊野町方言であろう。多くの方言で、二重母音 /ai/ が同化しているという事態が見られる。当地以上に、モーラ方言を積極的に認めにくい状況にあるといえよう。そのため、熊野町方言のような状況にある方言は、モーラ方言といわないでモーラ・シラビーム混成方言と呼ぶほうが、現実的であろう。よりモーラ方言に近い方言、よりシラビーム方言に近い方言のすべてがこれに入る。たとえば、モーラの独立性が強く、モーラどうしの音声変化の多く認められない京都方言などは、モーラ方言というにふさわしく、時にモーラを越えた音声変化の認められる大分県国東半島の杵築市方言などは、よりシラビームに近い方言ということができるのではないかと考える。今後は、このような立場から、それぞれの地方差を明らかにしていくことも必要ではないかと考える。

一方、モーラ・シラビーム混成方言方言とシラビーム方言とは、音声的には大きな差を認識させてくれるものである。ということは、モーラを音韻上の概念としないで、音声的な概念として捉え直してみることも必要なのではなかろうか。そうすれば、たとえば、出雲地域の人々が [mattse] (松江) のように2モーラに発音していることなども、韻律上の研究対象にもなりえたのではないかと考えるものである。

参 考 文 献

- 1) 時枝誠記 『国語学原論』岩波書店 1941年。
 - 2) 服部四郎 「国語の音韻体系」と題する論文。この論文は、1949年12月、ローマ字調査審議会に提出されたものと、1950年3月、再び同会に提出された補遺の部分とで成立している。後に、『音韻論と正書法』(研究社、1951) 再録される。さらに、氏は以後多くの論文でモーラについて述べている。その一部は、氏の著書『言語学の方法』(岩波書店、1960) にも見られる。
 - 3) 柴田 武 「音韻」の項 (国語学会『方言学概説』武蔵野書院 1962年)。
 - 4) 日下部文夫 「拍から音節へ」(岡山大学法文学部学術紀要21 1964年) この論文は、『論集 日本語研究 ②アクセント』有精堂出版株式会社 1977年 に再録されている。
- 注
1. それぞれの人についての論述の所在を示す。
参考文献 1), 164~165ページ。
参考文献 2), 155ページ。
参考文献 3), 141~142ページ。
 2. 「地方アクセント研究のために」50ページ。(『新しい方言研究』加藤正信編 明治書院 1985年)
 3. 注2の書。50~52ページ。
 4. 上野善道の、方言の表現とそのアクセントについての分野での業績としては、次の4論文が目される。これらが、モーラ構成音素とアクセントの問題についての、多くの示唆を与えてくれる。
「青森市 [方言] のアクセント素の所属語——1~3音節体言——」『日本海文化』11 1948年
「青森市方言の動詞のアクセント」『日本海文化』13 1986年
「青森市方言4モーラ体言のアクセント」『金沢大学日本海域研究所報告』20 1988年
「青森市方言の形容詞のアクセント」『アジア・アフリカ文法研究』19 1990年
 5. 平山輝男、金田一春彦両氏の研究によって成された「国語アクセント類別語彙表」にも、モーラ構成音素を含む語としては、「氷、舅、使い、額、鎧、間、昨夕、扇、思い、女、境、鯉、胡瓜、蚕、鹽、病」の名詞、「赤い、浅い、遠い、厚い、黒い、高い、無い」などの形容詞が見られる。しかし、/N/ /Q/ の音素は見られない。
 6. アクセント表示の方法は、「川上 葵『日本語音声概説』桜楓社 1977年」によった。
 7. 藤原與一『日本語方言文法の研究』岩波書店 1949年
 8. 助詞が接したときのアクセント形については、/ai/ の項で一般的な原則のほとんどを述べた。以下においては、その部分で取り上げた事象独自の場合のみについて述べることにする。
 9. 川上 葵のいう「文頭のイントネーション」と同じ類の事象であろう(『日本語音声概説』桜楓社 1977年 114~115ページ)。
 10. ボー「シと発音されるときには、嫁入りのときに被る白い被り物のことである。通常の、日よ

- けなどで被る物は「ボ」シといわれる。
11. 拙稿「広島市方言の対話における強調の方法について 国語研究21 1965年」参照。熊野町は、広島市と等しい強調法を用いている。
12. 単語アクセントは、文のアクセントとしての調査でしかないということになると、アクセント調査の方法も考え直す必要もでてこよう。なお、
- また京都方言などで、単語として発音されるとき、2音節3モーラで、○「○」○に発音される「秋」のような語類（二音節名詞第五類）の解釈も別のものになることもありそうである。
13. 「ツローテ（連れ立って）」は、終止形の用いられていない語である。

Summary

The rhythm of Japanese is based on its writing system "Kana" which also represents its phonological segment. /R/ (a vowel with a long durative time), /N/ (a nasal) and /Q/ (a consonant with a long durative time) are called the special phonemes in Japanese, the *môra* phonemes. The suprasegmental feature of Japanese is characterized by these phonemes and /i/ after the vowels.

Pitch accent on /R/, /N/, /Q/ and /i/ at word-level is different from that at sentence-level. Comparing the pitch accent patterns on these phonemes at word-level and sentence-level, it is possible to say that the accent pattern on the phoneme /i/ is most stable and /R/, /N/ are less stable, then the accent pattern on the phoneme /Q/ is always inconsistent.

The results show that it is not reasonable to say that Japanese has only two groups in its dialects, namely the *Môra* dialect and the *Syllabeme* dialect. The study of accent patterns in Kumano dialect shows the both features of the *Môra* dialect and the *Syllabeme* dialect. Thus we should third category 'môra-syllabeme hybrid dialect' when we group the Japanese dialects.